

## 緊急

# 水稻の高温障害対策と病害虫防除の徹底について

岡山県備中県民局農林水産事業部  
備南広域農業普及指導センター

6 月中旬以降、高温が続いており、「中国地方の 1 ヶ月予報」（広島地方気象台：7 月 3 日発表）でも向こう 1 ヶ月の平均気温が高い確率 80%、降水量は少ない確率 50%で、今後の気温も高いことが予想されています。早生品種はこれまでの高温により、平年より早く幼穂形成期になり、中生・晩生品種は分けつ期となっており、概ね順調に生育しています。

登熟期間の高温は、高温障害による白未熟粒多発の原因となります。さらに、高温により緩効性肥料の窒素成分の溶出が早まると、登熟期間に窒素不足となり高温障害を助長することがあります。

今後の気象情報等に十分留意するとともに、高温障害を回避するための技術対策の徹底をお願いします。

また、斑点米カメムシは多発生が予想され、特に、不稔を発生させるイネカメムシは、出穂期直後が防除時期となるため、今年の出穂状況をよく確認し、地域の状況及び主要発生種に応じ適切な防除の徹底をお願いします。

## 1 水稻の生育状況

- ・早生品種は、幼穂形成が平年より早く始まっており、茎数は平年並～少ない。このまま高温傾向が続くと、早生品種の出穂及び成熟は早まると予想される。
- ・中生・晩生品種は、分けつ期で、生育は概ね良好である。

## 2 高温による影響

### （1）白未熟粒の多発

- ・登熟期の高温により白未熟粒が増加する。
- ・主な品種の多発条件は次のとおりとなっている（岡山県農業研究所主要成果より抜粋）。

#### ○あきたこまち

- ・出穂 10～30 日後の日最高気温の平均値が 31℃を超えると白未熟粒の発生率が高くなる。33℃を超えると顕著に増加する。

#### ○コシヒカリ

- ・出穂 5～25 日後の日最高気温の平均値が 31℃を超えると白未熟粒の発生が急増する。

#### ○きぬむすめ

- ・出穂後 20 日間の日平均気温の平均値が 25.5℃以上になると白未熟粒の発生が増加する。

#### ○ヒノヒカリ

- ・出穂後 25 日間の日平均気温の平均値が 25℃以上になると白未熟粒の発生が増加する。

### （2）胴割米の発生

- ・登熟初期（出穂後 10 日間）の日最高気温が高いほど胴割れ率が増加する。

## 3 高温障害対策

### （1）早生品種

#### ①追肥による稲体活力の維持

- ・出穂後でも極端に葉色が低下している場合は、実肥として、穂揃い期に窒素成分で 1 kg/10a 程度施用する。
- ・ただし、遅い時期の追肥は、玄米蛋白質含量を高め、食味が低下する場合がある。

#### ②かけ流し及び夜間かん水等による地温低下

- ・出穂後の水管理は、通常は間断かんがいであるが、高温が続く場合には、用水が豊富な地域ではかけ流しや夜間かん水等を行い、地温を低下させ根の活力維持を図る。
- ・用水が不足し、干ばつが懸念される地域においては、湛水状態が維持できるよう努める。

### ③早期落水防止による玄米品質の維持

- ・早期落水は、未熟粒や屑米、胴割米、茶米の増加につながるため、出穂後 30 日頃を目安にできるだけ落水を遅らせる。

### ④適期収穫の実施

- ・刈り遅れは、胴割米や茶米等が増加し、玄米品質低下の原因となる。
- ・登熟期間が高温で経過すると、予想以上に成熟期が前進することがあるため、出穂後の積算気温等を参考に、登熟の進み具合（青味籾率）を随時確認し、計画的に収穫作業の準備を進め、適期収穫に努める（表 1）。

表 1 早生品種の収穫適期の目安

| 品 種     | あきたこまち    | コシヒカリ     |
|---------|-----------|-----------|
| 出穂後の日数  | 35～45     | 35～50     |
| 積算気温（℃） | 850～1,100 | 950～1,200 |
| 青味籾率（％） | 15～10     |           |

## （２）中生・晩生品種

### ①㎡あたり籾数の適正化

- ・籾数が過剰になると、白未熟粒が発生しやすいため、生育旺盛な場合は、土用干しで有効茎を適正に保つ。また 1 回目の穂肥を減らすか、穂肥を遅らせ籾数過剰を抑える。

### ②追肥による稲体活力維持

- ・登熟期間の窒素不足を回避するため、基肥－穂肥分施肥体系では、栽培暦どおり 2 回目の穂肥（出穂前 10 日頃）の施用を徹底する。
- ・全量基肥－発肥料であっても、栽培期間中の高温・多照の影響により肥効が早期に切れることが予想される場合、葉色が予想以上に低下している場合は、生育状況を見て穂肥時期に追肥を行う。

### ③穂ばらみ期～出穂期の水管理

- ・幼穂形成期～穂ばらみ期までは、根腐れ防止のため浅水管理とするが、穂ばらみ期～出穂期は、茎葉からの蒸散が多く、最も水を必要とする時期であるため、湛水管理を基本とする。
- ・用水が不足し干ばつが懸念される地域では、この期間に湛水状態が維持できるよう努める。

## 4 病虫害防除の徹底

### （１）斑点米カメムシ

- 「斑点米カメムシの防除を徹底してください！」（植物防疫情報第 2 号 令和 7 年 6 月 30 日付）
- ・病虫害防除所のすくい取り調査（6 月下旬の県北部、20 回降り/ほ場）によると、アカスジカスミカメのほ場あたり虫数は 38.5 頭と平年（30.4 頭）よりやや多く、カメムシ類の幼虫は 866.3 頭と平年（31.4 頭）より多くなっている。1 か月予報（6 月 26 日発表）では、気温は平年より高く、降水量は少ないとされており、カメムシ類の加害や増殖に好適な条件となる。
- ・主要発生種により防除時期が異なるため、植物防疫情報第 2 号を参考に、防除を徹底する。
- 近年被害が問題となっているイネカメムシは、出穂期に加害されると不稔となり、登熟期に加害されると斑点米を生じる。
- ・不稔対策の防除適期は、出穂期直後であり、穂に直接薬剤がかかる液剤の防除効果が最も高い。越冬成虫は 7 月頃から水田に飛来し、出穂した水田に次々と移動して加害・産卵を繰り返すことから、「その被害は、イネカメムシが原因かも（令和 7 年 3 月作成）」のチラシを参考に、発生状況に応じた的確に防除する。

### （２）トビイロウンカ

- ・県内で、トビイロウンカの飛来は確認されていないが、近隣の県で飛来が確認されている。長期残効性箱剤を使用していない場合は、特に今後の発生状況に十分な注意をする。

### （３）コブノメイガ、紋枯病

- ・高温年に多発しやすいコブノメイガや紋枯病は、予察情報に留意しつつ、ほ場観察を十分に行い、的確に防除する。
- ・特にコブノメイガは、止葉に食害を受けると登熟不良を招き、玄米品質が大きく低下する場合があるため、ほ場での発生状況を確認し、発生が確認された場合は早期に防除する。